

パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して (XVII)

竹 下 春 日

われわれは、パスカルの《Apologie》のプラン復元の為めに、種々なる論述を行って来たが、なお論じ残された重要事項にかんし、以下検討を行って見たい。

I 未分類断章の総数について

われわれが前回において掲示した表中の数字——未分類断章の総数は、Lafuma による Édition Delmas の Section I の中に含まれた断章の総計を、基礎としたものである。Lafuma は、『第一写本』における既分類断章 (Classé) とともに、未分類断章 (Non classé) を各章に分類配属せしめたのである。既分類断章群にかんしては、数量にかんするかぎり大した問題は存しない。なぜなら、これらの断章群 (Classé) はパスカル自身によって、liasses として残されたものだからである。

しかし未分類断章の総数については、書き残された断章群のうち、どれだけのものが《アポロジー》のプランを構成するものとして予定されていたかは、問題の生ずるところである。それゆえわれわれは、Lafuma の行ったところを検討する要が、存するのである。

『第一写本』中の未分類断章群は、33個の「集録」Séries から成り立っている。Lafuma は、これらの中から《アポロジー》に直接関係ないものと見做された fr. を除いて、これ以外のもの (Non classé) を、《アポロジー》の各章

chapitre に配置したのである。彼が《アポロジー》に無関係とした未分類断章群を含む *Séries* は、内容上次のごとき諸ノート (notes) である——『プロヴァンシャル』 *Les Provinciales*, 『恩寵文書』 *Les Écrits sur la grâce*, 『貴族の身分に関する三つの論』 *Les Trois discours sur la condition des Grands*, 『幾何学または論理学にかんする概論序説』 *Une Préface d'un Traité de Géométrie ou de Logique*, 『ペリエ嬢の身の上で起こった奇蹟に関する文書』 *L'Écrit sur le miracle opéré sur Mademoiselle Périer*, 『真空論』 *Le Traité du Vide*, 『個人的な諸ノート』 *Notes personnelles* (瞑想録, 問題の解決を述べたもの, 感謝の祈りの文書, 書簡の下書等), 『雑録』 *Notes diverses* (読書, 外見上の矛盾, 修辞, 文体等にかんする省察) および『奇蹟』 *le miracle* にかんする叙述の大部分。

以上の《アポロジー》に直接関係を有しない諸文書を除いたもの (『第一写本』中のもの) が、《アポロジー》を構成するものとして、各章に配置されているが、しかし Lafuma は『奇蹟』にかんするものの一部 (La. 467-Br. 588, La. 470-Br. 805, La. 471-Br. 222, La. 736-Br. 564) を、《アポロジー》に関係あるものとして、その諸章に編入している。しかしまた、彼が《アポロジー》のプラン中に配属せしめたものは、これに留まらない。『第一写本』以外の文献資料からも選別して、プラン中に収めている。この文献資料としては、次のものが存する——『ポール・ロワイヤル版』 *L'Édition de Port-Royal* (La. 8-Br. 19, La. 100-Br. 275), 『草稿原本』 *Le Recueil Original* (La. 565-Br. 633), 『ヴァラン稿本』 *Les Portefeuilles Vallant* (La. 208-Br. 320), 『ゲリエ写本』 *Les Recueils manuscrits Guerrier* (La. 9-Br. 276, La. 308-Br. 488) 等〔カッコ中の数字は、当文献から Lafuma によって、《アポロジー》のプランに属するものとして採用された断章の番号である〕。

上述した所を再言要約すれば、Lafuma が《アポロジー》のプラン中に所属せしめたものは、——(1) 『第一写本』中の既分類断章群 (*liasses* 中の *fr.*) と、(2) 同写本中の《アポロジー》に関係ありと判定される未分類断章群 (即ち同写本中においてアポロジーと無関係であると見做される未分類の諸断章を除外したもの), および (3) 『第一写本』以外の文献に依拠する諸断章の三者である。

扱て以上のごとき Lafuma による断章の取捨選択は、内容上これを客観的に観て、ほぼ妥当であると、言いうる。次にわれわれが XIV 回および XV 回において行った未分類断章群（『第一写本』以外の文献資料に基づく fr. を含む）の各章への配分も、Lafuma の判定選択の結果を、裏付けているのである。即ちわれわれは、未分類断章と、各章（既分類断章より成る）との連関を、直観によることなく、論理と推論によって、発見し配置したのである。かようにわれわれの場合にあっても、二個の断章を除いて、Lafuma の採用した未分類断章のすべてが、各章との連関を論理的に辿りえたのである。それゆえ、Lafuma の選択採用した断章数を基礎として、これに必要な手続（例えば抹消断章の除外等）を施して得られたところの、われわれの 前回の表中に掲げられた数字は、パスカルが Non classé 執筆時における《アポロジー》のプランに予定していた断章数と大差ないものと、推定しうるのである。

II 《アポロジー》のプランにかんする

P. Ernst の新仮設

(一) われわれは、パスカルの《アポロジー》のプランにかんする Ernst の新仮設に対し、われわれ自身の批判を試みようとするものであるが、これに先立って彼自身の仮設の内容を略述することにし度い。このためには、われわれは先づ、多くの諸家が写本中のタイトル表にかんして抱いておる解釈を、理解しておかねばならない。『第一写本』ならびに『第二写本』中に見られるタイトル表は、左右二列に筆写されている。これを示めせば、次の通りである（番号は Lafuma に拠るものであり、後述の便宜上附したものである。写本中には、存在しない）。

1° Ordre.

11° A. P. R.

12° Commencement.

2° Vanité.

13° Soumission & Usage de la raison.

3° Misère.

14° Excellence.

- | | |
|------------------------|------------------------------------|
| | 15° Transition. |
| 4° Ennui. | 15° bis La nature est corrompue. |
| 5° Raisons des effets. | 16° Fausseté des autres religions. |
| 6° Grandeur. | 17° Religion aimable. |
| | 18° Fondements. |
| 7° Contrariétés. | 19° Loi figurative. |
| | 20° Rabbinage. |
| 8° Divertissements. | 21° Rerpétuité. |
| | 22° Preuves de Moïse. |
| 9° Philosophes. | 23° Preuves de Jésus-Christ. |
| | 24° Prophéties. |
| 10° Le Souverain Bien. | 25° Figures. |
| | 26° Morale chrétienne. |
| | 27° Conclusion. |

通説においては、各章すなわち各リヤス (liasse) は、内容上番号順に (1°～27°) 連続的であり、1°～10° ないし 1°～11° 及び 11°～27° ないし 12°～27° が、それぞれ《アポロジー》の《第1部》Première partie, 《第2部》Seconde partie を構成しているものと、解されているのである。これに対し Ernst は、次のごとき独自の所説を、展開している。

(二) 「われわれは、諸々のリヤス (断章綴) 間の連続性を、発見しようとする必要があった。だがタイトル表はさらに、非常に貴重な要素も、われわれに提供していたのだ。タイトルが縦に並べられた二行の列 (deux colonnes) に分けられた、このタイトル表なるものは、二組の《各自まとまったリヤス群》、つまり一方は 10 個のリヤスから成り、他方は 17 個のリヤスから成るものを、暗示しているのであろう。この指示にこそ従う必要があったのだと、そう思われるのだ。27 個のリヤスが一連の《連続体》suite continue を成していたものと、最初から仮定してはならない。こうした事は、一種の要請というものであったろう。以上のごとく思われるのだ。」¹⁾ かように Ernst は、通説の主

張する 1°~27° の一系的連続性を否定し、左右二列のそれぞれにおける組織的自律性を説くのである。すなわち、「二組の各自まとまったリヤス群の各々の論理的でダイナミックな連続性」 *la continuité [logique et dynamique de chacun des deux ensembles de liasses*²⁾ を、彼は指摘し、各リヤス群は「一連の連続的継起」 *une suite continue* をなし、「等質的なる一群」 *un groupe homogène*³⁾ を構成するものと、見做している。言い換えれば、この二組のリヤス群は、「アポロジーの二つの素描」 *deux ébauches de l'Apologie*⁴⁾ であり、27個のリヤスが左右二行に分けられて記載されていることも、それ自身 *deux* (《Pensées》) を示すものであると、Ernst は説くのである⁵⁾。

(三) 事情が以上の如くであるならば、叙上の2個のリヤス群の間には、「不連続」 *discontinuité*⁶⁾ があるということになる。より具体的に言えば、第2番目のリヤス群(右側のタイトル群)の冒頭に位置する《A. P. -R.》が、左右両群の継ぎ目ではない、ということになる。「このリヤス〔《A. P. -R.》〕が、最初の10個のリヤス群とこの後に来る17個のリヤス群との間の、必然的移行 *une transition nécessaire* の役割を演じ、またその機能を果していると考えことは、われわれには困難のように思われる。』⁷⁾ —かく Ernst は、述べている。

では斯様に見られる理由は、何んであろうか。まず第一に、《A. P. -R.》の章中には、人間存在の《偉大と非惨》について、またこの矛盾した不可解な謎にかんする記事が見られるが、これはパスカルが前に述べたことの「再言」 *rappel* であるのか、「今後展開すべき叙述の下準備」 *des amorces d'un développement ultérieur* であるのか、不明である⁸⁾。彼によれば、ここには曖昧さがあり、この意味で、*continuité* は必然的であると、断定しえないのである。

次に Ernst の説くところに拠れば、通説のごとく左側のリヤス群と右側のリヤス群とを連続的一系を成すものと見る場合には、—彼 Ernst は、Jean Mesnard, Annie Barnes, Patricia Toplis の諸説⁹⁾ に依拠して述べているが—「その役割を確定することやその位置を正当化すること、またその機能を決定することが難しくなるような、7個のリヤスから成る一群 (《A. P. -R.》より《愛すべき宗教》に至るリヤスを含む)」 *un groupe de sept liasses (depuis 《A. P. -R.》, jusques et y compris 《Religion aimable》) dont il est difficile*

de préciser le rôle et de justifier la place et de déterminer la fonction¹⁰⁾ が、見出されると言う。つまり、かような違和的な介在物の存在こそは、*discontinuité* を明白に示すものであると、彼は主張するのである。

(四) しかし Ernst によれば、リヤス両群は決して *discontinuité* に終始するものではない。これら二群が示すものは、「互に可成違いはするが、しかし相互に全く無関係ではない二つの素描」*deux ébauches assez différentes l'une de l'autre, sans être toutefois totalement étrangères l'une l'autre*¹¹⁾ なのであり、両者の間には「接近」*rapprochements*¹²⁾ が、見られるのである。このことは、先きの「不連続性」にもかかわらず、左右二列のリヤス群の間に、「パスカルのアポロジーにかんする企図における連続性」*la continuité du projet apologétique de Pascal*¹³⁾があること、更に言えば、アポロジーには「基本的連続性」*continuité fondamentale*¹⁴⁾があることを、意味する。彼 Ernst はこの事態を、次のようにも述べている——「アポロジーの根本的統一性」*l'unité foncière de l'Apologie*¹⁵⁾、「作品全体を貫いて走っているパスカルの意図に見られる一貫性」*l'unité du projet pascalien courant au travers de l'oeuvre tout entière*¹⁶⁾、「パスカルによるアポロジーの企画全体の深い一体性」*l'unité profonde de l'ensemble du projet apologétique pascalien*¹⁷⁾ と。

(五) 以上のごとき連続性ないし一体性は、先述の二群の不連続と共存的であり、両者が「非常に緊密にかつ非常に強靱に補い合っている」*très étroitement et très solidement complémentaires*¹⁸⁾ 事態を、物語るものである。言い換えれば、この両群は「補足的なる二つの素描」*deux ébauches complémentaires*¹⁹⁾ を示すものであり、かつはまた「この二つの素描の連帯性」*la solidarité des deux ébauches*²⁰⁾を、表示するものである。これを要するに、タイトル表の示すリヤスの二群は、その内容の上から観るとき、「アポロジーの二個の素描の不連続と相補性」*la discontinuité et la complémentarité de deux esquisses de l'Apologie*²¹⁾ というこの二性格を、まさに体现するものに外ならないのである。

(六) われわれは Ernst 説において、リヤスの二群が不連続と相補の関係にあることを見たのであるが、この関係はなにを反映しているであろうか。彼に

よれば、これは次の事態——「パスカルのアプローチにおける歩み、進展、深化」leur progrès, leur évolution, leur approfondissement [leur は *approches pascaliennes* を指す]²²⁾ に、由来するのである。より具体的に言えば、第一のタイトルの列記（左側のタイトル群）は、アポロジーの設計を示す「最初の状態」un premier état²³⁾、「一時的で未完の」provisoire et inachevé²⁴⁾ 状態である。そうして、二番目に列記されたタイトルなるもの（右側のタイトル群）は、「パスカルによるアポロジーの企画にかんする捉え直された全体」l'ensemble ressaisi du projet apologétique pascalien に応ずる「第二の状態」un second état²⁵⁾ を、示すものである。

かくして「写本の順序」l'ordre de la Copie は、「27個のリヤスの継承的な一連の続きもの」une succession continue de vingt-sept liasses ではなくて、「二つの異った継承的な続きもの」deux successions continues distinctes²⁶⁾ である。したがって、「アポロジーの順序」l'ordre de l'Apologie と「写本の順序」l'ordre de la Copie とは、異なるのである²⁷⁾。しからば、Ernst にとって、「アポロジーの順序」とは、具体的には、いかなるものであろうか。

(七) ——(a) れわれは既に、Ernst が Mesnard, Barnes, Toplis の諸説に依拠して、11°《A. P. -R.》より 17°《愛すべき宗教》に至る7個のリヤスが「その役割を確定すること」等が「難しくなるような」一群であると、見做していることを、知っている（三参照）。さらに彼は、《A. P. -R.》は内容上「一般的序論」Introduction général²⁸⁾ に相応しいものと、考えている。

(b) タイトル表中の第二番目に列記されたもの（右側のリヤス群）のうちには、15° bis《本性は堕落している》なるタイトルが存するが、「このタイトルは、一個のリヤス群全体に対応していないのであろうか。まずより正確に言えば、『このタイトルは、最初の位置に[左側に]列記された設計案を構成する10個のリヤス全体を、指示すべく予定されているではあるまいか。』……このタイトルは実際、その言葉通りのものを、そして最初に置かれた10個のリヤスの対象そのもの及びその内容を、全体そのものとして、表現しているのではあるまいか。

もしこの仮定が……事実に対応しいものならば、二番目のタイトルの列記

は、パスカルのアポロジの企画を捉え直した全体像を、提示しているように思われるのだが。このアポロジの計画中には、最初の10個のリヤスが、まさに一定の場所に——正確には、15°《人間を知ることから神への移行》のリヤスと16°《他宗教の虚偽》との間に——挿入されることになろう。」²⁹⁾と、Ernstは言う。

かくして彼によれば、5個のリヤス、すなわち、11°《A. P. -R. 》、12°《始まり》、13°《理性の服従とその利用》、14°《この神の証明方法の卓越性》および15°《人間を知ることから神への移行》が、内容上一群を構成することになり、これらは《アポロジ》の「序論」Prolégomènesの役割を果すものである。したがって、《アポロジ》の第1部たる《神なき人間の惨めさ》は、この後に始まるのである³⁰⁾。

(c) これより先き Ernst は、最初に列記された10個のリヤスは、《神なき人間の惨めさ》を描き、《本性の墮落》la corruption de la nature (1°《順序》中の La. 29-Br. 60に所載)を、《本性その自身によって》par la nature même提供するものと、している³¹⁾。しかも15° bis 《本性は墮落している》というタイトルは、「一般的なタイトル」titre généralであり、これは最初に置かれたタイトルの列記を構成するすべての特殊なタイトル(1°~10°)を含みかつ指示するものであろうと、説くのである³²⁾。かようにして、一番目に列記されたリヤス群の内容およびこの群中に所属する La. 29-Br. 60中の《第1部 人間の本性は墮落していること。本性それ自身によって。》なる叙述と、二番目に列記されたタイトル中の《本性は墮落している》(15° bis)との照応一致を根拠として、かつ叙上の(a)・(b)を勘考して、Ernstは、次のごとき《アポロジ》のプランにかんする彼自身の「新仮設」une hypothèse nouvelleを、提示するのである³³⁾。

一般的序論(《A. P. -R. 》)

——主題の説明：真の宗教なるものは、ただただ人間存在の《矛盾》を説明しうる宗教のみであり、人間の《惨めさ》に有効なる薬をもたらすであらう。

——さて《神の知恵》は、人間存在の創造と墮落を啓示する……。

——いったい神の意図するものが、人間の罪を贖うことであり、かつはまた神を求める人々に自らを露わにすることであるとするなら、全霊をもて神を求めるのでなければならない……。

諸論：真理探求の義務と諸条件。

- 1° 探求の義務と自己放棄の必要性。(Commencement)。
- 2° 理性の、限られてはいるが実際に即した役割。(Soumission & Usage de la raison, Excellence, Transition)。

第1部：神なき人間の惨めさ。

(または《人間本性は墮落していること。本性それ自身によって》)。

本論への入門：心理的な展開方法論理的区分……(Ordre)。

1° 《宗教は尊敬すべきものであるということ》：《宗教は人間なるものを熟知している》。

- a) 強い自然的な欲望を実現せんとするには、人間は無力たること。悲惨と偉大さの共存する人間の複雑さの謎を解かんとするには、人間は無力に過ぎるということ(Vanité)。
- b) 悲惨(Misère, Ennui)と偉大さ(Raison des effets, Grandeur)の共存する人間の複雑さの謎を解かんとするには、人間は無力に過ぎるということ。
- c) キリスト教弁証論の結論：《原罪遺伝》の教説により、ただキリスト教のみが、われわれ人間の本质にかんする不可解の謎を、解くのである。(Contrariétés)。

2° 《宗教は愛すべきものであるということ》：《宗教は真の幸福を約束

する》。

- a) 人間を至福に至らせるべき哲学者らの空しい努力。
エピクロス派 (Divertissement) も、ストア派の連中 (Philosophes) も、幸福の問題を解決しない……。だが、キリスト教はこれを能くする。(Le Souverain Bien)。
- b) 人間を至福に至らせるべき人間的宗教の空しい努力。
一切の(人間的なる) 宗教は、虚偽である。(Fausseté des autres religions)。
しかしキリスト教は、一人の《贖い主》を呈示する。(Religion aimable)。

第2部 神と階^{とも}なる人間の至福。

(または《贖い主がいるということ、聖書によって》)。

《宗教は真実であるということ》。

1° 序論：探求の手段 (Fondements) と手段の扱い方 (Loi figurative)。

2° 論証：イエス・キリストなるペルソナとしての贖い主が、あるということ。

- a) 二つの基本的なるキリスト教の真理(原罪と約束されたメシア)は、つねに信じられて来た。(Rabbinage, Perpétuité)。
これらの二つの真理なるものは、モーセと全ユダヤ民族によって保証されている。(Preuves de Moïse)。
- b) 《贖い主》なるものは、愛の秩序にあって最上位を占めるイエス・キリストたるペルソナと、同一であるとされ (Preuves de Jésus-Christ), 預言なるものを成就し (Prophéties), かつまた象徴のすべてを、実現するのである。(Figures particulières)。

3° 確認：真のキリスト教は、贖い主の霊験なるものを証しする生きた証拠である。(Morale chrétienne)。

一般的結論

知識なるものは、愛なしには何ものでもない。知的回心は、心情の回心なしには何ものでもない。だが心情の回心なるものは、まさに神の賜物であるのだ。(Conclusion)。

III Ernst 説への批判

(一) Ernst は、15° bis 《本性は堕落している》 *La nature est corrompue*. なるタイトルを、「一般的なタイトル」 *titre général* としているが (II の七の c 参照)、これにはなお問題が、存する。というのも、未分類断章群に属する次のごとき二個の断章が、見出されるからである。これらは、それぞれ《*Nature corrompue*.》 (La. 132-Br. 439), 《*La nature est corrompue*.》 (La. 601-Br. 546) なる小見出しのないしタイトルを、有するものである。ところで Ernst は《*La nature est corrompue*.》を、事実上《第1部》全体のタイトルに相当するものと見做し、これに属するものとして、概略 1°~17° の諸章を当てている。すなわち通説では、該タイトルは章名と見做されているが、Ernst はこれを《部》 *Partie* の名称と見るのである。しからば上掲の二個のタイトル (La. 132, La. 601) も、これを章名ではなく、部名と見做さざるをえなくなる。しかし、これは不合理と言わざるをえない。元来パスカルは、多数の断章の分類を便ならしめるために、タイトルおよび小見出しを附与したのである (拙論 I 回参照)。すなわち、彼はリヤス (分類綴) を作成する際に、断章を即座に一定のリヤスに編入しうるように、小見出し・タイトルを附与したのである。

ところで、リヤス一個は事実上一個の《章》 *chapitre* を形成しているのであ

るから、パスカルは一定の章中に収めるために、小見出し・タイトルを記したのである。したがって、叙上の二個の小見出し・タイトル (La. 132, La. 601) が、《部》名であるとするれば、彼はリヤスを作成する際に、該二断章を 1°~17° 中のどのリヤスに所属せしめるべきか、改めてこれを決定しなければならないのである。これは、パスカルの小見出し・タイトル附与の目的から見るとき、即座に分類しうることには成らず、不便と言わねばならない。それゆえ、小見出し・タイトル附与が効果的である為めには、これらは章名ないしこれと同じ役割を果し得るものでなければ、ならないのである。かくて《La nature est corrompue.》なるタイトルには、「一般的なタイトル」ではなく、章名であると、解すべきものである。したがって、Ernst の新仮設におけるごとく、1°~10° を——《La nature est corrompue.》(15° bis) なるタイトルが存するからと言って、かつまたこの 15° bis が 15°《Transition》と 16°《Fausseté des autres religisns》の間にあるからと言って——15° と 16° との間に置くことは、不合理であると、言わねばならないのである。

(二) 10°《至福》Le Ssouverain Bien の章中に属する La. 300-Br. 425には、《第2部》Seconde Partie なる小見出しが存する。これにかんして、Ernst は次のごとく述べている——「この《第2部》なる表現は、とにかく謎 mystérieuse であり、また謎に留まるものであるということを、告白せざるをえないのだ… 実際、この《第2部》に対応する第1部 la première partie なるものが、どれであるかは、全然分らないのである。」³⁴⁾ と。しかしわれわれの見地からすれば、これは決して mystérieuse ではないのである。《第2部》なる小見出しの存在は、この断章 (La. 300) が《第2部》に属するものであること、したがってこの断章を含むリヤスたる 10°《至福》の章が、《第2部》に所属することをまさに示すものに外ならないのである。Ernst ならびに通説が、この章 (10°) を《第1部》のものとするのは、タイトル表中のタイトルの順序が筆写される以前に、既に乱されたこと (VI回参照) を、知らぬからである。

(三) (a)——最後に、Ernst の説くごとく、タイトル表中の左側のタイトル群 (1°~10°) が、右側のタイトル群中に見出されるタイトル——15° bis 《La nature est corrompue.》の内容に相当するならば(換言すれば、このタイトル

が先述のごとく《部》の名称であるとするならば), このタイトルを紙片に記し, かつこれを 15° の後に綴り込むという作業を行った時, なぜパスカルは, 直接計画通りに, 左側のリヤスのすべてを右側のリヤス群中に, 挿入しなかったのであろうか。かかる作業は, 病中と雖も姉もしくは召使いに断章内容を口述筆記せしめたパスカルにとって, これらの人たちに指示するのみで事足りる, 恐らくは数分しか要しない, 容易な作業だったはずである。しかもパスカルは, 以前に論証したごとく, リヤスの順序変更を, 長期を見通して予想していたのであり, これに対する処置対策を講じていたのである (V回のVI参照)。

(b)——扱て Lafuma の考証に拠れば, 未分類の断章群 (少くとも 10 個のシリーズ) は, 1659 年以後に書かれたのであり, したがって既分類の断章群 (リヤスに綴られたもの) は, 1658 末以前に執筆されたものである³⁵⁾。それゆえ 1659~1661 年 (1662 年 8 月 19 日死去) の 3 年間に, 数分しか要しないリヤス群の編成替えの作業——しかも病中にあっても, 他人に指示すれば, 容易に行いうるもの——が, 行われえなかったとは, 到底考えられないところである。かくてリヤス群のタイトルが, 字本の順序が示す通りの仕方で, 左右二列に並置されていること自体が, Ernst 説の誤謬を明示するものに外ならないのである。

以上 (一)~(三) の論拠により, Ernst の新仮設なるものが大胆かつ興味あるにもかかわらず, われわれはこれを根本から否定せざるをえないのである。

註

- 1) Pol Ernst, *Approches pascaliennes*, Éd. J. Duculot, S. A., Gembloux (Belgique), 1970. p. 522.
- 2) *ibid.*
- 3) *ibid.*
- 4) *ibid.*, p. 524.
- 5) *ibid.*, p. 659.
- 6) *ibid.*, p. 530.
- 7) *ibid.*, p. 524.
- 8) *ibid.*
- 9) *ibid.*, p. 703.
- 10) *ibid.*, p. 524-525.

- 11) *ibid.*, p. 524.
- 12) *ibid.*, p. 525.
- 13) *ibid.*
- 14) *ibid.*, p. 527.
- 15) *ibid.*, p. 526.
- 16) *ibid.*, p. 527.
- 17) *ibid.*, p. 529-530.
- 18) *ibid.*, p. 527.
- 19) *ibid.*, p. 529.
- 20) *ibid.*, p. 528.
- 21) *ibid.*, p. 530.
- 22) *ibid.*
- 23) *ibid.*, p. 653.
- 24) *ibid.*
- 25) *ibid.*
- 26) *ibid.*, p. 651.
- 27) *ibid.*, p. 530.
- 28) *ibid.*, p. 654.
- 29) *ibid.*, p. 528. — タイトルの直前に附せられた番号は、論者が便宜上 Lafuma による番号付けを、利用したものである。以下同様。
- 30) *ibid.*
- 31) *ibid.*, p. 525.
- 32) *ibid.*, p. 653.
- 33) *ibid.*, p. 657-658.
- 34) *ibid.*, p. 167.
- 35) Lafuma, *Recherches pascaliennes*, Paris, 1949, p. 66. (註了)

〈補遺〉 — Ernst の新設に対しては、なお彼が、パスカルの所謂 《le chapitre des puissances trompeuses》 および Filleau の 《Discours》・Périer の 《Préface》・《A. P. R.》の章の三者（これらの内容は一致している）に見出される諸章の順序（VII 回参照）を無視していることを、われわれは指摘しておき度い。